

ルカの福音書 19 章 1～10 節「失われた者を捜して救う主」

18 章に記されているある金持ちの指導者は「あなたが持っている物をすべて売り払い、貧しい人たちに分けてやりなさい」とのイエス様のことばを聞き、非常に悲しみました。この指導者は自分の行いに自信を持っていたのでしょう。そして、行いの見返りとして永遠のいのちを得られるのではないかと考えていたようです。しかし、聖書が一貫して教えているのは、救いは行いによるのではなく、神の恵みによるということです。

1. ザアカイの状態（：1～4）

イエス様はエルサレムに向かう途上にあり、エリコの町に入って行かれました。そこにザアカイという人が住んでいました。彼は取税人でした。取税人が異邦人に仕えており、自分たちから搾取しているので、人々は取税人を「罪人」と呼んで、嫌っていました。ザアカイは「取税人のかしらで、金持ちであった」ということです。彼は自分の仕事や生活に満足していたでしょうか。喜びがあったでしょうか。きっとそうではなかったと思います。立派な家に住んでいたでしょうけれども、お客に来る人はいなかったでしょう。周りの人から嫌われていたから、寂しかったでしょう。物質的には何でも手に入れることができても、心には空しさがあったでしょう。人々から脅し取っていることに心が責められたでしょう。それでも、取税人の仕事で成功し、かしらとなってプライドを持ち、他の人々の生活と比べて優越感を持ち、自分を納得させていたのでしょう。

イエス様がエリコに来たと聞いて、ザアカイはどんな方か見てみたいと思いました。イエス様は、人々から罪人と呼ばれるような人にも分け隔てなく接していました。イエス様の弟子の中には、取税人であったマタイもいました。そのようなことを聞いていたのかもしれませんが、ところが、通りに出て行くと、人々がたくさん集まって来ていて、ザアカイは背が低かったので、人々の後ろからでは見えません。それに、嫌われ者ですから、彼のために場所を空ける人はいなかったでしょう。

それで、ザアカイは先のほうに走って行って、木に登り、上からイエス様を見ようとしています。彼は群衆をかき分けてイエス様の前に出て行こうとはしませんでした。木の上からイエス様を見おろし、またイエス様に救いを求めている人々を見おろしたのです。自分は助けをもらう必要はない、そんな弱者ではないと強がっていたのではないのでしょうか。しかし、本当は心が渴いていたのでしょう。木に登ることまでして、イエス様を見てみたいと思っていたのです。

人には、何か悪循環から抜け出せない、変えたいと思う自分の状態を、自分ではどうにも変えられない、ということがあるかもしれません。あるいは自分のしたことで罪責感に悩まされることがあるかもしれません。そういう中で苦しんだり、不安になったりします。自分で解決の方法を捜しますが問題は解決しません。それでも、そういう自分の状態をさらけ出していくことはできず、助けを求めることができないことがあります。しかしそんな人にも、神様は救いの御手を伸ばしてくださる、御声をかけてくださるのです。

2. イエスの招き（：5～6）

5 節。イエス様が立ち止まって、木の上のザアカイを見上げて、声をかけたのです。初めて会うのにイエス様はザアカイの名前を知っていました。親しく名前を呼ばれ、自分を受け入れてもらえることが、ザアカイは本当にうれしかったことでしょう。

また、イエス様は「急いで降りて来なさい」とおっしゃいました。プライドを捨てて、降りて来るようにと言われたように思います。

そして、「今日、あなたの家に泊まることにしているから」とおっしゃいました。イエス様はすでにザアカイと親しい交わりを持つと決めておられるのです。神の御子であるイエス様は、ザアカイのことをすべてご存知で、彼を救いに導くこともすでにご存知なのです。

救い主イエス様は、今も私たちと親しい交わりを持つとしてくださいます。一人一人にいのちを与えてくださった神様は、それぞれのことをすべてご存知でいてくださいます。そして、みことばによって、聖霊なる神様の働きによって、個人的に語りかけてくださいます。

聖書の中に、「見よ、わたしは戸の外に立ってたたいている。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしはその人のところに入って彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」（黙示録 3:20）という主のことばがあります。私たちが心を開いてイエス様を素直に受け入れることができるように、ご自身との交わりに招いてくださるのです。

ザアカイは、びっくりしましたが、大喜びで、木から降りて来て、イエスを家にお迎えしました。

3. 恵みによる救い（：7～10）

この様子を見た人々は「あの人は罪人のところに行って客となった」と文句を言いました。人々にはザアカイが救われること、変わることは少しも考えられませんでした。しかし、イエス様をお迎えしたザアカイの心はそれまでとはまるで変わりました。イエス様を家にお迎えしただけでなく、自分の心にイエス様をお迎えしたのです。そして、心から自分の罪を悔い改めました。これまで行なってきた悪をやめて、正しいことをする勇気を持つことができました。8節。

「だれかから脅し取った物があれば」と言って、自分がこれまでしてきた罪を認めて、悔い改めました。そして、その悔い改めが真実であることを行動によって表すのです。律法にある、人の持ち物を盗んだ場合は2倍のもので償うことが基本でした。4倍にして返すというのは、普通以上に誠意を尽くして償うことです。悔い改めから生まれた自発的な誠実、あふれ出た感謝だったのです。さらに、財産の半分を貧しい人たちに施すというのですから、ザアカイは持っていた財産の多くを手放すことになったでしょう。それでも、彼の心には喜びがいっぱいだったと思います。イエス様に受け入れていただいた感謝に満たされ、持つものを神様のために献げたのです。

そのザアカイに対してイエス様は救いを宣言されました。9節。どうして「この人に」ではなく「この家に」なのでしょう。「家」ということばでそこに住む家族を指し、その人たちの生活を指しています。ですから、「救いがこの家に来ました」と言ったのは、一つには、ザアカイが救われて、救われた者としての生き方が彼の生活の中に表されたということです。彼は今までの生き方を、それによって得た財産と共に手放して、新しい生き方を始めます。神に背を向けていたほうから神に向かうほうへと、心も行いも180度方向転換しました。このように、本当に救われたなら、生き方に現れるのです。

もう一つは、ザアカイに家族がいたのであれば、彼の救いの経験と信仰による歩みは家族にも及んだということです。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」を思い起こします。一人の人がイエス様と出会い、救われると、救いはその人の家に、家族に来ることになります。

そして、イエス様はザアカイの救いの理由を「この人もアブラハムの子なのですから」と言われました。バプテスマのヨハネがユダヤの人々に言いました。「それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません」(3:8)。ユダヤ人だから救われているのではありません。悔い改めて救い主イエス様を受け入れる信仰によって救われるのです。パウロがガラテヤ人への手紙に書いています。「信仰によって生きる人々こそアブラハムの子である、と知りなさい」(3:7)。そのように、ザアカイがイエス様を受け入れたこと、そして信仰によって生きるように変えられたことで、「救いがこの家に来ました」と主は宣言されたのです。18章で金持ちの指導者がイエス様のことばを聞いて悲しんだときに、「人にはできないことが、神にはできるのです」と言われたことがザアカイに実現したのです。

そのように救いを与えるためにイエス様はこの世に来られました。10節。「失われた者」とは、人が本来あるべき神様の御許から離れて、滅びに向かっている状態のことです。心を変え、生き方を変えたいと思っても自分では変えられません。まさにザアカイは「失われた者」でした。しかし、そのザアカイのところへイエス様が来てくださり、親しい交わりを持ってくださいました。そして、ザアカイは悔い改めて、イエス様を受け入れ、人生が変えられました。神様がザアカイに救いを与えてくださったのです。

救い主イエス様は、罪の中で失われた者である一人ひとりのこともご存じで、捜して救うために来てくださいます。ご自身との交わりに招いてくださいます。そして、イエス様を受け入れる者に救いを与え、喜びの人生を与えてくださるのです。イエス様を心にお迎えするなら、神様との関係が正され、人との関係も正されていきます。悔い改めて、罪を赦していただき、生き方が変えられます。神様のみことばに従い、神様が喜ばれる歩みをし、人々に仕えることができるようになります。心が本当に満たされるのです。イエス様をあなたの心にお迎えしましょう。その決心を祈りましょう。